

大阪インターナショナルチャーチ
2016/7/24
ルカ 7 : 36-50 「借りのない人生」
ウィル・コトレル

ルカ 7 : 36-50

7:36 さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた。7:37 すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏のつぼを持って来て、7:38 泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った。7:39 イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから」と心ひそかに思っていた。7:40 するとイエスは、彼に向かって、「シモン。あなたに言いたいことがあります」と言われた。シモンは、「先生。お話しください」と言った。7:41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりには五百デナリ、ほかのひとりには五十デナリ借りていた。7:42 彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」7:43 シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。7:44 そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。7:45 あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。7:46 あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。7:47 だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」7:48 そして女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。7:49 すると、いっしょに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」7:50 しかし、イエスは女に言われた。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」

あなたは自分自身についてよくわかっていますか。盲点はありませんか。本当に好きなものは何か、やる気にさせてくれるものは何か、わかっていますか。自分自身を知ることは、仏教からイスラム教、無神論に至るまであらゆる文化や思想で、真の自由と知恵へ続く道として重要視されます。クリスチャンの人生にもこれは大切ですが、もしかすると、少し違った意味であると言えるでしょう。というのも、自分自身についての判断が、イエスをどのように捉えるかを左右するからです。そして、自分自身についてもイエスについても間違った結論を出してしまう可能性もあるのです。この個所にはそういうことが描かれています。世間のこともイエスのこともわかっているつもり男性と、人生はめちゃくちゃだけれど自分に助けが必要なことを自覚している女性が登場します。

では、ルカが語るシモンの家での出来事とともに見ていきましょう。そして、この話をとおして、私たちがどうしようもない罪人であると自覚する必要があることと、イエスが偉大な救い主であることを学びましょう。

I. どうしようもない罪人であると自覚する。

ルカがここで語っている話の全容を把握するには、まずここで取り上げられている主なテーマに取り組む必要があります。それは、罪です。この個所には直接的にも間接的にも随所で罪が取り扱われていて、避けることはできません。ルカは騒ぎを起こした女性を「ひとりの罪深い女」と

表現しました。この女性について記されているのはこれだけです。ではまず、私たちが罪について誤解していることと、自分自身が罪人であるという正しい視点をイエスが私たちに与えてくださることについて見ていきましょう。「罪」というものを私たちが理解しないと、この個所の主旨を見落とすことになるからです。

a. 罪とは何か。

i. 罪とは何でしょう。どう定義できるでしょうか。「悪い行為をすること」と多くの人は考えます。盗み、殺人、不貞など、犯罪を犯すことを考えます。これは部分的に正しいと言えますが、それがすべてではありません。

1. では、「罪はどこから来るのでしょうか。」と尋ねたら、いかがでしょうか。先ほどとは違う質問です。聖書が言う罪とは、悪い行為をすることだけではなく、私たちの性質のもっと根本的なことを指します。末期がんなように根深い心の病です。聖書におけるもっとも包括的な罪の定義を挙げるとするなら、ローマ 14:23 でしょう。「信仰から出ていないことは、みな罪です。」神への信頼の心から出ていないものはすべて罪だというわけです。罪とは、神以上に何か他のものを好むことです。

a. 神の栄光をたたえず、神の神聖さを畏れず、神の偉大さも御力もたたえないことです。神の真理を求めず、神の知恵やうるわしさを尊ばず、神の善良さを味わわないことです。神のまことと神の約束を信頼せず、神の掟を守らず、神の義に敬意を払わないことです。神の怒りを畏れず、神の恵みとご臨在を大切にせず、神のご人格を愛さないことです。

2. もちろん、私たちは罪深い行為をしてしまうことがあります。けれども、枝も幹も根もなければ実がならないように、罪深い行為にも根があります。それは、神を拒むことです。体の中の病気が、症状として表に現れるように、心の中の腐敗が罪深い行為を生むのです。別の個所でイエスは、悪は心の中から出るのであって、どこからともなくやって来るのではないとおっしゃいました。

ii. 神の被造物は、神がお造りになった世界に暮らしています。その被造物が神を無視するなら、神への侮辱であり、私たち自身の恥でもあります。私は前回来日した際、ホームステイを受け入れてくださるいくつかのご家庭でお世話になりました。もし私がどなたかのお宅に行き、我が物顔でふるまい、私を受け入れてくださった方々を完全に無視して一言もしゃべらず、お礼の言葉も贈り物もなかったらどうでしょう。それではあまりにもひどすぎます。それほど罪はひどいものです。気の滅入るような話ですが、罪の深刻さを理解しなければ、この個所のすばらしさがわからないのです。

ではこれを念頭に、罪と正しいことや間違っただけのことについてシモンがどう考えているかを詳しく見ていきましょう。

b. シモンの視点一周囲と比べる (36-40 節)

i. 今日の個所で、罪深い女はイエスがシモンの家で食事をしていることを知り、招待されてもいないのに、イエスに会うためにやってきます。考えてみてください。皆さんも、食事会や結婚披露宴に人を招待しなければならなかったことがあるでしょう。そのとき、誰を招待するか、誰を招待しないか、誰を主賓席に置くか、などを考えなければなりません。ぜったいに来てほしくないと思っていて人が当日現れて参加したらどうしますか。披露宴の会場に酔っ払ったホームレスが現れたとします。そして、新郎に近づいたかと思うと、なんと、しがみついて泣き始めるではありませんか。そんなことが起こったら、一刻も早く出て行ってほしいと思うでしょう。それが、招かれていない女がイエスに近づいたときのその場の緊張感です。38 節には、彼女が泣きながらイエスの足を涙

でぬらし、髪の毛でぬぐい、高価な香油を塗ったとあります。きっと、香油の香りが立ち込める部屋で、皆は静まりかえり、彼女の泣きじゃくる声だけが聞こえていたでしょう。39 節には、これを見ていたシモンがひそかに何を考えていたかが明かされています。

1. 「この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから。」シモンはイエスを偽宗教指導者として軽蔑し、女をそこにいるにふさわしくないと見下します。
2. これはおそらく、シモンの世界観によるものだと思います。彼の中では、罪は人を測る物差しだったのでしょう。彼の罪に対する考え方は、横向きと言えます。つまり、他の人と比べて自分はどうか、自分に比べて他の人はどうかということだけを考えるのです。このような世界観の中では、義という意味で娼婦とパリサイ人とはかけ離れた存在となり、まったく別世界の生物と言えるでしょう。
3. シモンは、罪人に対する自分の考えを盾に、自らの良心を守りました。まったくの独善です。この女よりも自分は道徳的で受け入れられるべき人間だと思いたかったのでしょう。ピリピ3 章で、パウロは変えられる以前の自分について語りました。これは、シモンの自己評価に通じるころがあります。そこには次のようにあります。「3:5 私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、3:6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。」
 - a. 私たちは、これほど自信を持ってはいないかもしれませんが、自分自身についてこれに似た評価をしています。あなたは罪人ですか、と誰かに聞いたことがありますか。9 割の人が「良い人間になろうと努力しています」と答えるでしょう。私たちは、非難されるところがないというのは良かれと思って物事を行うことだ、と自分に言い聞かせようとします。完全でなくても、「悪く」なければそれでいいと考えるのです。シモンが自分と女を比べたように、私たちも、自分と他人を比べて、「少なくとも、あの人みたいではない」と思ったりします。

c. イエスの視点一上を見る (40-43 節)

けれども、これに対してイエスは、ある話を聞かせ、シモンの考えを正します。そして、罪について非常に重要なポイントを指摘されます。

- i. これは、40-43 節に記されています。「7:40 するとイエスは、彼に向かって、『シモン。あなたに言いたいことがあります』と言われた。シモンは、『先生。お話しください』と言った。7:41 『ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りていた。7:42 彼らは返すことができなかつたので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。』7:43 シモンが、『よけいに赦してもらったほうだと思います』と答えると、イエスは、『あなたの判断は当たっています』と言われた。」ここで興味深いのは、イエスが罪を借金に例えておられることです。
- ii. 借金なら、私たちにもわかりやすい話です。借金があるところには必ず、貸主（お金を貸した人）と借主（お金を借りた人）がいます。住宅ローンなどのローンや借金について考えてみてください。借金があると、精神的ストレス

を感じます。不安になったり、負担を感じたりします。利息が膨れ上がって、どれだけ返済しても元金が減らないように思えることもあります。

- iii. イエスの話は、私たちの罪が返済不能な借りへと膨れ上がることを思わせてくれます。すべての過ちは報いを受けなければなりません。誰でもそう思っています。誰かに悪いことをされたら、すぐにでも正してほしいと思うでしょう。しかし、神の前でなされた私たちの過ちはどうでしょう。これまでずっと神に背を向け、神をないがしろにし、信じようとしなかったことはどうでしょう。それが罪です。「信仰から出ていないことは、みな罪です。」（ローマ 14：23b）と書かれていたみことばを思い出してください。神を信頼せずにしてしまったことはすべて、神に対する罪なのです。
- iv. 犯罪を犯した人は、社会への償いをしなければなりません。犯罪の内容が深刻であればあるほど、償いの内容も重くなります。これは人間のほかりに基づいた話ですが、では、神に対してはどうでしょう。
1. **神は永遠のお方なので、神に対する私たちの罪の結果も永遠です。**ですから、たったひとつの罪が神に対する永遠の借りを作ってしまうのなら、一カ月間の罪はどうでしょう。一年、十年、二十年、五十年となったらどうなるでしょう。貸主に対する自分の借りがどれほど大きいかわかりますか。
- v. 自分の基準では、自分自身はそんなに罪人ではないと思うかもしれませんが、神の基準ではどうでしょう。
1. あなたは、唯一の神としてこのお方を信じていますか。
 2. 神以外のものを生きがいにしていませんか。
 3. 神の御名に畏怖の念を抱いて、軽々しく使わないようにしていませんか。
 4. 隣人を自分自身のように愛していますか。
 5. 自分自身についても周囲の人についても常に真実を語っていますか。さて、あなたの成績はどうでしたか。
- vi. 基準が高すぎて不公平だ、と思うでしょうか。
1. 私たちが人を判断するとき、自分なりの「正義」を基準にします。けれども、神がご自身の被造物である私たちを裁かれるとき、何を基準にされるのでしょうか。それは、神ご自身の完全さではないでしょうか。私たちが自分の基準に基づいて人を判断するのなら、神が同じようになさるのを不公平と言えるでしょうか。
 2. 私たちは、神に命という借りがあります。その命は、本来なら、神を100%愛して完全に神に従う人生を歩むためのものです。その命を神に「返済」することはできるでしょうか。
- vii. この女は、イエスという男性がこの大きなギャップを埋めるために来られたことに気づきます。彼女は、自分が完全とは程遠いことを知っていました。また、少しでも完全でないところがあれば、まったく完全でないのと同じだということもわかっていました。イエスの話の中で、42節a「彼らは返すことができなかつたので」とあるとおり、金を借りていたふたりとも返済能力がなかったのは、このためです。実際、その場所にはふたりの借主がいました。ひとり、自分が借主であるという自覚がなかっただけです。
- viii. あるとき、私は両親の留守中に家の留守を守っていました。両親は猫を飼っています。そして、庭には大きな木があります。ある日の夕方、いつも同じ時刻にご飯を食べに帰って来る猫が帰ってこなかったことに気づきました。家の中や庭をあちこち探しても見つかりません。何時間も経ってから、庭の木のところに行って木の上を見上げると、猫が枝にひっかかって動けなくなっていました。上を見上げるまで、何が起こっているか、私にはまったくわかりませんでした。同じように、私たちも上を見上げて神を視野に入れるまで、神と自分との関係がどうなっているか気づかないのです。

私たちが神の御前に罪人であると自覚できるように、イエスは私たちの視点を変えさせてください。自分ではなく神を軸にして、自らの過ちを見るということです。これは、イエスを知る上でとても重要なステップです。しかし、これで終わりではありません。次に、この話の良い知らせを手短にご紹介します。私たちが罪人であっても、イエスが偉大な救い主であることを喜べる、という良い知らせです。

II. キリストが偉大な救い主であることを喜ぶ。

a. シモンと罪深い女

i. イエスに対する人々のあらゆる反応に、喜んでいるかどうかが見えます。イエスは、44-47 節でそれを説明されます。

1. シモンは、独善的な考えでイエスを軽蔑します。シモンにとって、イエスはにせ預言者に過ぎません。

2. 罪深い女は、自らの罪深さを知り、愛と平安を受けることになります。この女性は、イエスを深く愛しました。

a. この女のみっともない姿に、多少の気まずさを感じる人は多いでしょう。けれども、痛いところをつかれたというのが私の感想です。この話を読むと、私はどれくらいイエスを愛しているだろう、と考えざるを得ないからです。この女性と比べると、ずいぶん冷めた愛だと思います。

i. 私は、イエスに祈りをささげられるし、みことばでイエスについて読めます。また、イエスについて他の人に話したり、説教を取り次いだりできます。これらのことを私は喜んでいるのでしょうか。こう考えると、決まりの悪さを感じました。

b. 皆さんも同じように感じるなら、自分自身がどれほど罪深いかということを忘れてしまっているのかもしれませんが、また、キリストの愛のすばらしさも忘れてしまっているのかもしれませんが。「しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」というみことばを思い出してください。私たちクリスチャンは、性善説という世間の考え方を受け入れてしまいがちです。

3. しかし、この個所からわかるように、自分が良い人間だと思うなら、イエスのことは宗教を教える教師のひとりとしか思えないでしょう。一方、自分が罪人であると自覚するなら、このお方の本当の姿が見えてきます。

b. 借主となった貸主

i. では、このお方の本当の姿とは何でしょう。誰もがこの質問を口にします。「罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう。」(48-49 節)

ii. ここでイエスは、女の罪が赦されたとおっしゃいます。この部屋にいた他の人々と同様、イエスもこの女を罪人と認定されます。しかし、宗教家のように罪があることを指摘するだけではなく、解決の道も示されました。イエスが罪を取り去ることがおできになるのです。イエスは、「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」と女におっしゃいました。この罪人は平安を得られるのです。

1. 今日、皆さんは自分がどうしようもない罪人だと思いながらここに来られましたか。もしそうなら、イエスがあなたを赦そうと待っておられることをわかってください。あなたがイエスを信じるなら、イエスはあなたのすべての罪を取り去ってくださいます。イエスは無限の恵みをもって、この上なく汚れた人もきよめてくださいます。

2. この女は、罪や恥があることでイエスを避けませんでした。むしろ、罪や恥がこの女にキリストの足もとで赦しを請わせたのです。それとは対照的に、シモンは自らの独善が邪魔をして、同じようにできませんでし

た。行いが良いことや、そのことを誇るプライドが、シモンにも必要な赦しをイエスからいただく妨げとなりました。

- iii. さて、周囲がけしからんと思うような主張をイエスができたのはなぜでしょう。神に対する罪を赦すと断言できるとはどういうことでしょうか。それは、イエスが神だからです。すべての借りはこのお方に対するものだからです。この貸主は、借りを取り立てに来られたのではありません。また、それを帳消しにするために来られたのでもありません。このお方は、自らの手でその借りを十字架へ携えるために来られたのです。貸主が借主になられるのです。私たちが返し切れない借りを引き受けてくださいます。私たちの借りはあまりに大きすぎて、唯一完済できる方法は、神の子のいのちと引き換えることです。イエスは、「執行官」を送って、あなたを裁きの場に引きずりだす権利のあるお方です。けれども、そうはなさいませんでした。代わりに、あなたの借りを永遠に片付けるために死んでくださいました。あなたはそれほど愛されているのです。このお方はそれほど偉大な救い主なのです。

- c. ここまでで学んだキリストの姿から、いくつか応用できることを考えてみましょう。
- i. 私たちの食卓に歓迎される人とは誰でしょうか。シモンのように、誰かをのけ者にしてもよいでしょうか。罪人であるという自覚があるなら、どんな人でも歓迎できるはずですが、自分は他の人より良い人間だと優越感に浸ることはないからです。
- ii. 宗教は、罪の問題を解決してくれません。けれども、福音はその答えをくれます。宗教は人を断罪しますが、福音は人を癒します。シモンは、あの女にあわれみを示すべきでしたが、そうはせずに裁きました。私たちはどうでしょうか。めっちゃくちゃな生き方をしている人にあわれみを持てますか。私たちには、誰をも裁ける根拠はありません。神の恵みを離れては、私たちは皆、同じようにさまようたましいです。
- iii. 借りのない人生を送りましょう。クリスチャンである喜びとは、罪という神に対する借りがイエスによって完済されたと知ることです。私たちは皆、喜びと平安と希望をもって生きることができます。

イエスの福音の中心にあるものとは、次のとおりです。あなたは自分が思っているよりずっと価値のある人間です。そして、あなたの望む以上に愛されています。もし今朝、自分は罪人だと自覚している人がいるなら、そして、イエスに赦しを願い求めて、このお方を主として受け入れるなら、イエスはおっしゃいます。「あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい。」